

若狭高浜漁協市場におけるヒラメの漁獲実態調査

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2025-06-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤本, 宏, 山田, 達哉, 山本, 岳男, 高橋, 庸一, 森田, 哲男, 塩澤, 聡 メールアドレス: 所属:
URL	https://fra.repo.nii.ac.jp/records/2014794

This work is licensed under a Creative Commons Attribution 4.0 International License.



若狭高浜漁協市場におけるヒラメの漁獲実態調査

藤本 宏^{*1}・山田達哉^{*1}・山本岳男^{*1}・高橋庸一^{*1}・森田哲男^{*2}・塩澤 聡^{*3}

(^{*1} 小浜栽培漁業センター, ^{*2} 屋島栽培漁業センター, ^{*3} 奄美栽培漁業センター)

ヒラメ *Paralichthys olivaceus* は日本周辺の沿岸域に広く生息し、沿岸漁業の重要な対象種である。また、栽培漁業の代表魚種であり、近年では全国で約2,500万尾の種苗が放流されている¹⁾。日本海北・中部系群のヒラメの漁獲量は、1995年には1,581トンであったが、2000年には909トンまで減少している²⁾。この減少したヒラメ資源を回復させるため、種苗放流が各府県で実施された。

小浜栽培漁業センターおよび宮津栽培漁業センターでは、日本海沿岸におけるヒラメの放流効果を明らかにするため、そのほぼ中央部に位置する若狭湾をモデル海域として2003年から放流試験を開始した。

放流効果を評価するためには、選定された魚市場で定量的な調査を実施し、放流魚の回収率や混入率を調べることが必要となる。そのためには、調査市場における対象魚種の漁獲実態や市場特性を調べ、それに基づいた調査計画、および得られたデータを解析しなければならない。そこで、調査市場である若狭高浜漁協魚市場におけるヒラメの漁獲実態や市場特性を明らかにすることを目的として、漁獲量、漁獲金額、単価、全長組成について調べたので報告する。

材 料 と 方 法

調査市場の概要 調査市場である若狭高浜漁業協同組合魚市場（以下、高浜魚市場）は高浜湾のほぼ中央部に位置する（図1）。この湾内には高浜、若狭和田および小黑飯、隣接する内浦湾には内浦と音海の5つの漁協が存在した。しかし、2001年にこれらの漁協は高浜漁協に合併され若狭高浜漁業協同組合が新たに発足し、他の4つの組合は若狭高浜漁協の支所となった。したがって、現在の高浜湾内に存在する魚市場は高浜魚市場だけである。

漁獲量調査 2001～2006年に高浜魚市場に水揚げされた全魚種の総水揚げ重量に占めるヒラメの貢献度を漁獲統計資料^{3,4)}から調べ、さらに市場台帳より月別の水揚げ重量と金額、および銘柄の区分方法を聞き取り調査した。また、高浜魚市場に水揚げされたヒラメについては全長および漁獲尾数を調べた。2004年7月～2005年10月まではセンター職員によって全長を1 cm 単位で測定したが、それ以降は専任調査員を配置し、全開場日・全数の調査を行った。なお、センタ

ー職員による調査では、午前中に水揚げされたヒラメはほぼ全数調査できたが、午後の水揚げ分はほとんど調査できなかった。そこで2005年10月までの未調査分については水揚げ台帳から毎日に銘柄別の漁獲重量を抜き出し、銘柄別の平均重量で除して漁獲尾数を推定した。

結 果

調査市場の特性 2001～2006年における高浜魚市場に水揚げされた全魚種の総水揚げ重量は平均964トン（705～1,069トン）で、特にブリ類（19%）、イカ類（10%）、マアジ（9%）の水揚げが多かった。ヒラメは主に定置網（大型定置網1統、小型定置網約10統）と刺網で漁獲されていた。水揚げされたヒラメは、漁協職員によって活力、体表の傷の有無、無眼側の黒化の状態によって活魚と鮮魚に選別される。さらに活魚扱いのヒラメは重量で小カレイ（400g 以下）、小ヒラメ（400～700g）、中ヒラメ（700～1,200g）、大ヒラメ（1,200～4,000g）および特大ヒラメ（4,000g 以上）の5銘柄に区分される。鮮魚扱いのヒラメは重量にかかわらず「ヒラメ」という銘柄になり、無眼側を表にして他の魚種と同様に市場へ並べられる。このうち無眼側黒化魚は活魚であっても鮮魚の「養殖」という別銘柄になり、活魚扱いとはならない。競りは10時と14時の2回行われ、毎週土曜日が定休日である。なお、福井県では全長30cm 以下のヒラメは漁獲規制の対象となっているため市場では取り扱われない。

漁獲量と漁獲金額 2004年7月～2008年12月までの水揚げ台帳より得たヒラメの漁獲量と漁獲金額を表1に示した。2004年を除いた4ヶ年のヒラメ漁獲量は平均14.87トン、漁獲金額は平均2,441万円であった。また、漁獲金額を漁獲重量で除した単価の平均は1,600～1,700円の間で推移した。月別のヒラメ漁獲量と単価を図2に示した。500kg / 月以上の漁獲量があったのは、2004年7月、2005年2～7月、2006年1～5月、2006年12月～2007年5月、および2007年12月～2008年6月と12月で、1年を通してみると冬期から初夏にかけて漁獲量が多かった。また、2004年および2005年の漁獲量の増加は1～2月からであったが、2006年以降はそれが早まり前年の12月から漁獲量が増加した。単価は月によって変動が大きく、漁獲量500kg / 月以

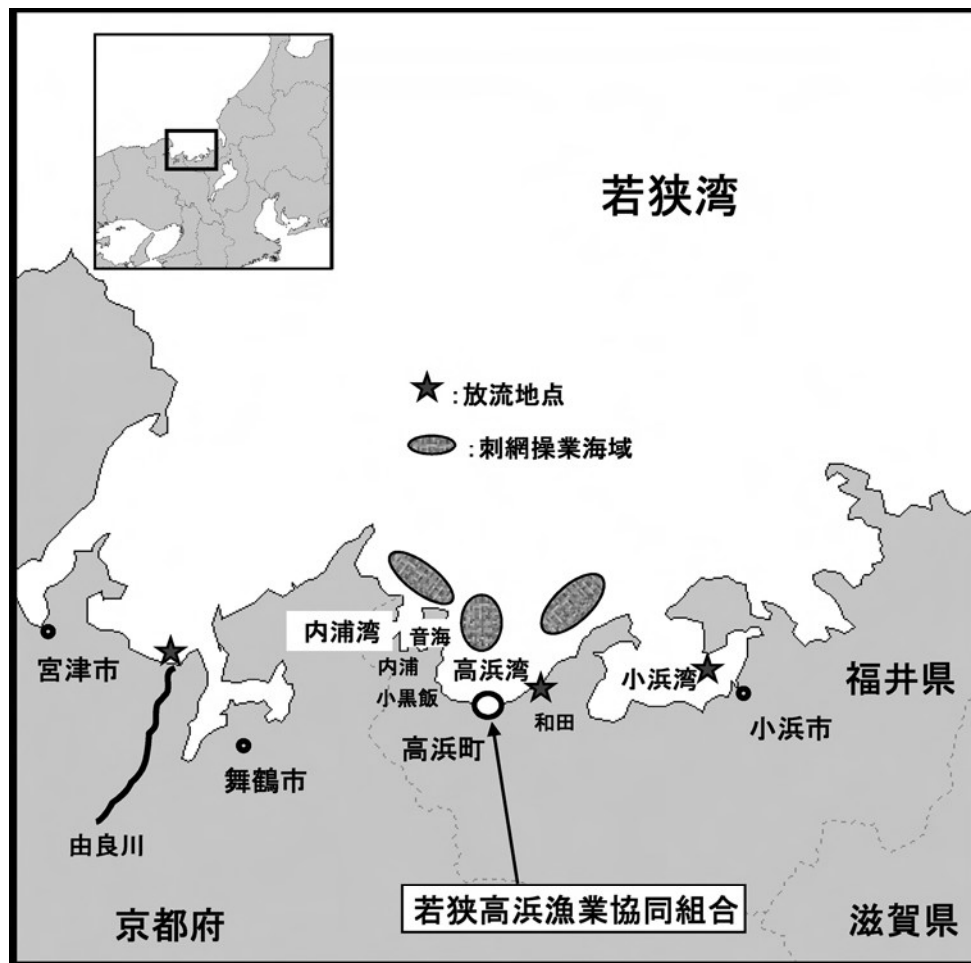


図1 ヒラメの放流地点と調査を行った若狭高浜漁協魚市場

上の月では平均1,592円/kg (1,024~2,264 / kg), 500kg / 月以下では平均2,448円/kg (1,470~3,479 / kg) と、漁獲量が少ない月で単価が上昇した。2007年以降は単価3,000円/kg を超える月は見られなくなった。

年別、月別の漁法別漁獲尾数 2005~2008年に水揚げされたヒラメの漁法別の漁獲尾数の割合を図3に示した。高浜魚市場のヒラメは小型定置網、大型定置網および刺網で漁獲されているが、その70~80%は刺網によるものであった。漁獲量の多い2006年の月別および漁法別の漁獲尾数を図4に示した。定置網ではほぼ周年漁獲されるがその量は15~568尾と少なく、漁獲尾数が増加する12月~5月の主な漁法は刺網(833~5,053尾)であった。また、漁獲尾数の少ない6月~

11月は刺網と小型定置網で漁獲された。

年別、月別の全長組成 2005~2008年の市場調査で測定したヒラメの全長組成を図5に示した。調査期間内では各年ともモードは全長35~40cmにあり、このサイズの占める各年の割合はそれぞれ49.7%, 38.5%, 48.5% および50.1% と全漁獲尾数のほぼ半数を占めた。さらに、2006年と2007年の月別全長組成をそれぞれ図6および図7に示した。2006年は1~5月のモードは37~42cmであったが、6月以降は32cmと小型化し、11月から再び38cmとなった。2007年は2006年と同傾向の組成を示し、1~4月と10月以降は38cmで、6~9月は32~34cmにモードが見られた。また、両年とも3月~5月にかけて60cm以上の大型魚の漁獲が多かった。

表1 若狭高浜漁協市場におけるヒラメ年間漁獲量と漁獲金額

年	漁獲量 (kg)	漁獲金額 (万円)	単価 (円/kg)
2004 ^{*1}	1,598.0	321.8	2,013.8
2005	14,005.0	2,387.1	1,704.5
2006	17,436.1	2,795.6	1,603.3
2007	13,159.7	2,152.9	1,636.0
2008	14,885.4	2,428.5	1,631.5
平均 ^{*2}	14,871.5	2,441.0	1,643.8

*¹ : 7月～12月の集計値

*² : 2004年は除いた

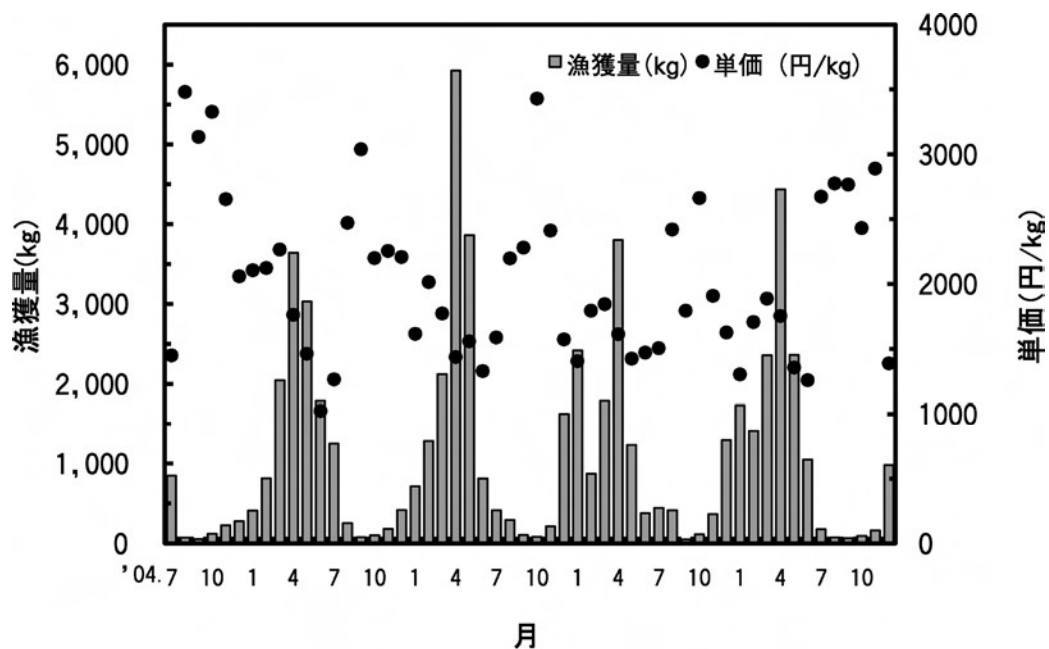


図2 若狭高浜漁協市場におけるヒラメの月別漁獲量と単価
(2004年7月～2008年12月)

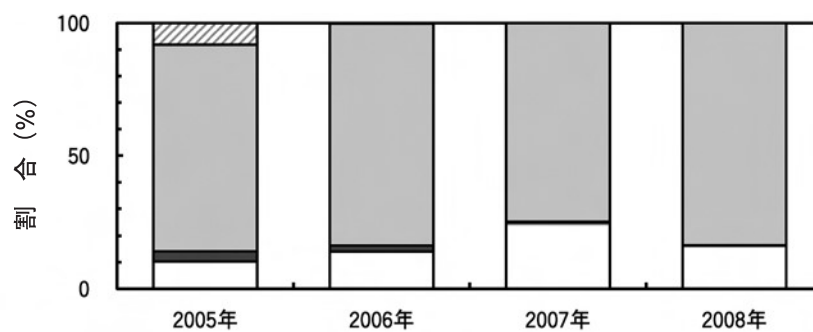


図3 若狭高浜漁協市場におけるヒラメの漁法別の漁獲尾数の割合

□ 小型定置網 ■ 大型定置網 ■ 刺網 ▨ その他

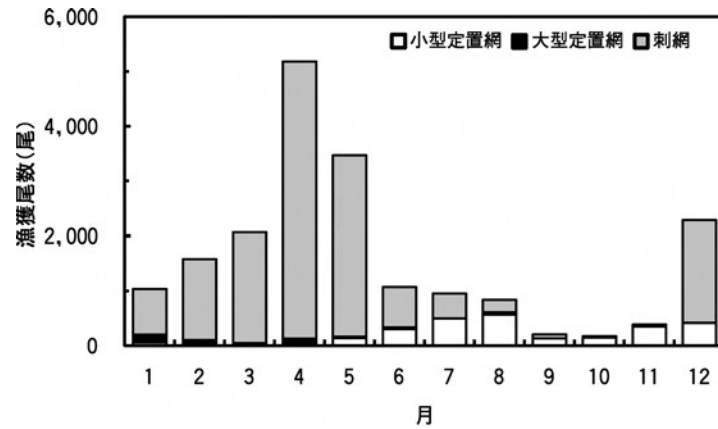


図4 2006年度のヒラメの月別、漁法別の漁獲尾数

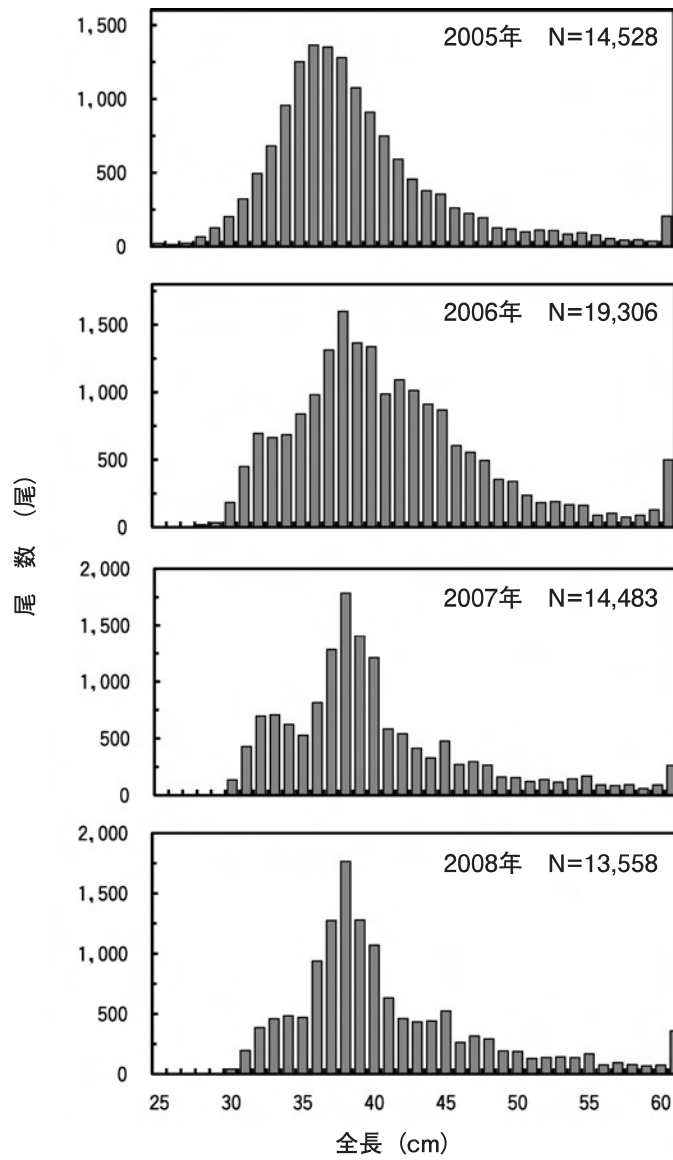


図5 若狭高浜漁協市場に水揚げされたヒラメの年別全長組成

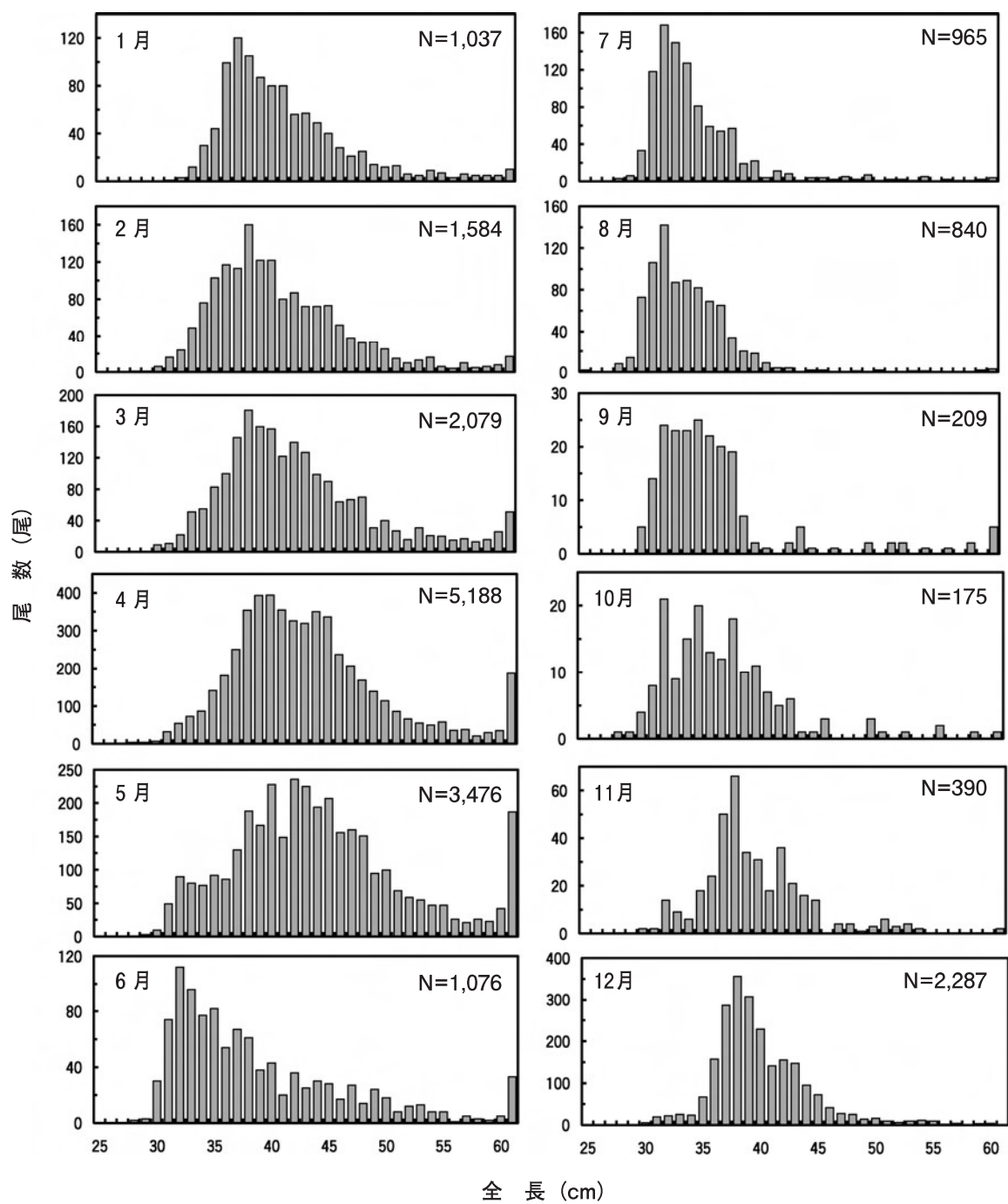


図6 2006年に水揚げされたヒラメの月別全長組成

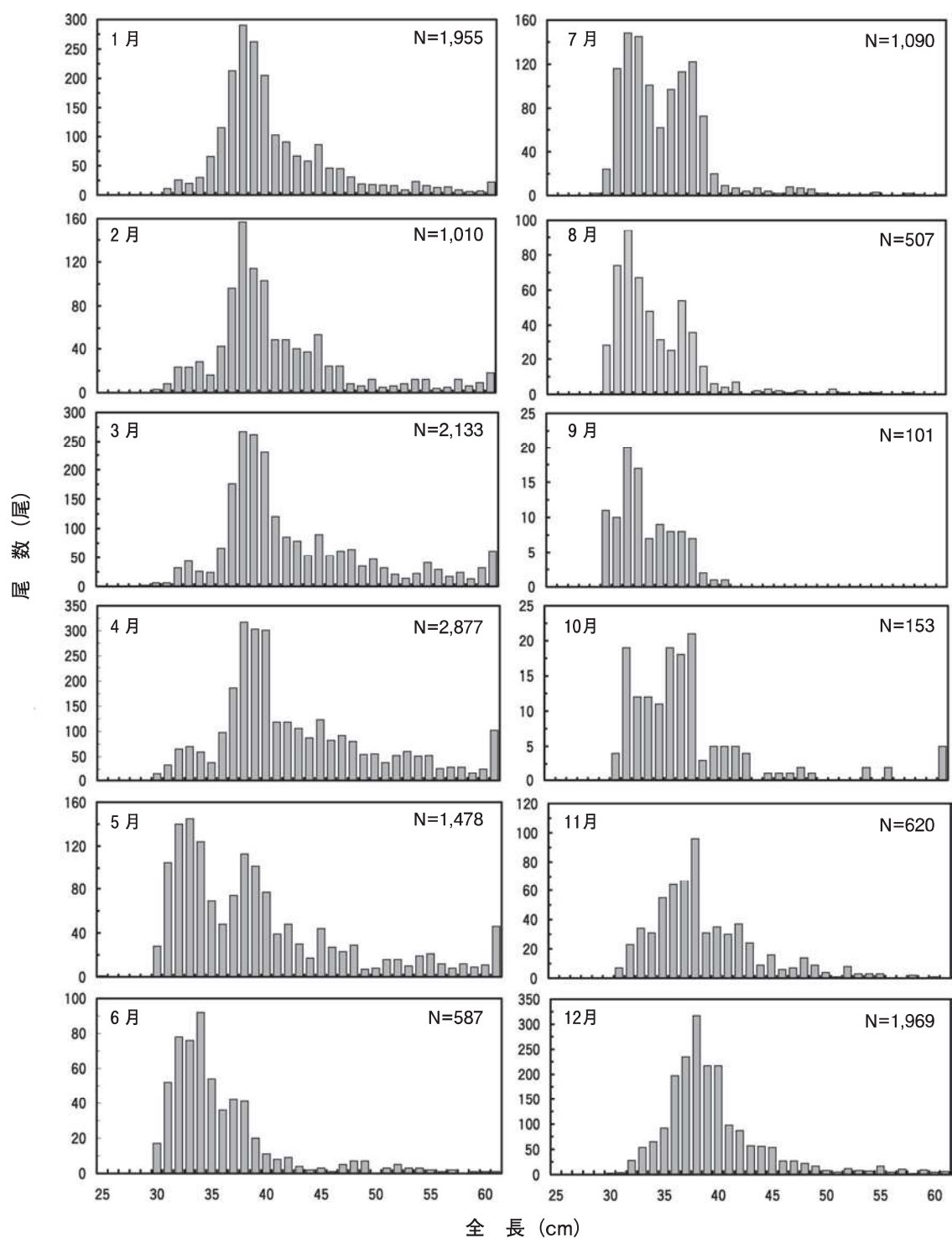


図7 2007年に水揚げされたヒラメの月別全長組成

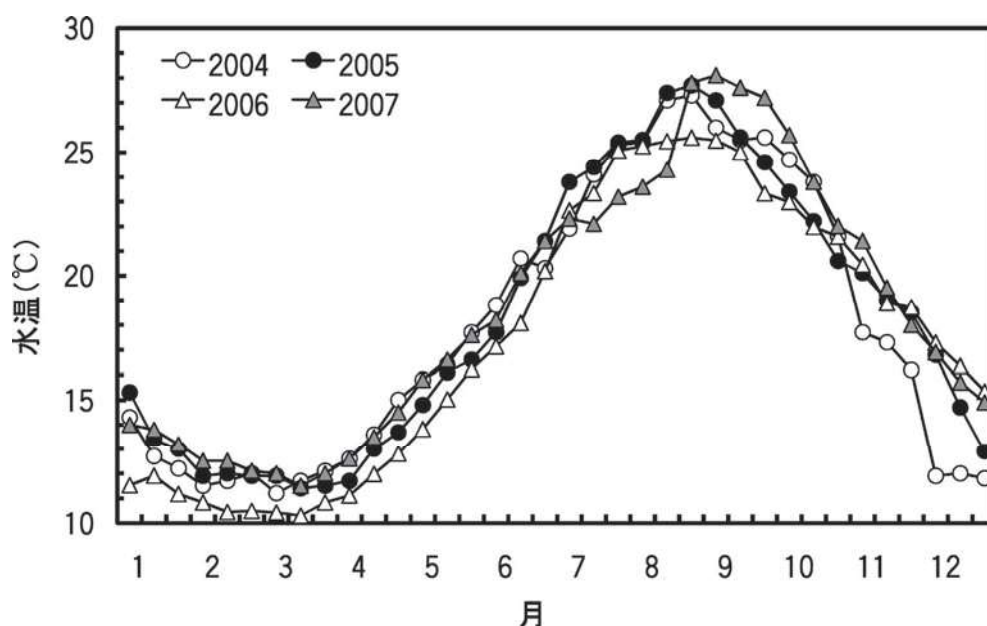


図8 小浜湾内の栽培漁業センター地先水温

考 察

高浜魚市場における全魚種の総水揚げ重量は平均964トン、ヒラメの漁獲重量は平均14.9トンであり、全魚種に占めるヒラメの割合は1.5%であった。しかし、福井県の2005～2007年におけるヒラメの漁獲量^{3,5)}は平均71トンであり、高浜魚市場は福井県全体の21.0%を占めた。

高浜魚市場のヒラメの水揚げは12月から翌年の5月頃が最盛期で、主な漁法は刺網であった。漁獲サイズは全長37～42cmが多く、特に3～5月は全長60cm以上の大型魚も多く漁獲された。若狭湾西部海域のヒラメの産卵期は3～6月頃⁶⁾で、産卵期には沖合から接岸し水深50m以浅の海域で産卵すること²⁾が知られている。高浜魚市場に水揚げされるヒラメ刺網の漁場は、漁業者からの聞き取りによると高浜湾内の大島半島側と音海側沖合の水深30～50m帯である(図1)。漁獲の最盛期は産卵期と重なり、水温の下降する12月～翌年の1月頃(図8)から産卵を控えたヒラメを対象として刺網漁業が行われていると考えられる。

漁法別にみると漁期の最盛期は刺網が主であるが、最盛期を過ぎた6月以降は定置網で漁獲されていた。これは定置網漁業がほぼ周年操業されるのに対し、刺網漁業者の対象が例年5～6月頃からサヨリ曳き網やアマダイの延縄漁等に替わるため、ヒラメの漁獲量が減少することがわかった。月毎の単価は、漁獲量の少ない時期が高く、水揚げされるヒラメは主に定置網に

よって漁獲されていた。刺網で漁獲されたヒラメは長時間網に絡まった状態のため、体表や鰭に傷がつきやすいことから鮮魚扱いになることが多い。高浜魚市場では総漁獲量の約25%が鮮魚扱いであり、鮮魚の価格は活魚の約5～6割程度である。定置網の漁獲物はほとんどが活魚扱いになるため、こうした漁法の違いも単価に影響していると考えられる。

一方、6月以降の漁獲量は減少し、月別全長組成のモードは全長32～34cmと小型化した。この海域のヒラメの誕生月を4月と仮定すれば、全長32～34cmサイズは前年生まれの1歳魚であり、最盛期の12～5月に漁獲される37～42cmサイズは2歳魚が主体と推定され、高浜魚市場に水揚げされるヒラメは1、2歳魚中心の若齢魚で構成されていると考えられる。全長30cmの漁獲規制もあることから、当歳魚を放流した場合、放流後約1年から漁獲加入すると考えられる。今後、高浜魚市場に水揚げされるヒラメの年齢を査定し、この海域のヒラメの成長特性を調べるとともに、放流魚の混入率および回収率を市場調査から調べて放流効果を把握することが重要な課題である。

文 献

- 1) 水産庁・水産総合研究センター・全国豊かな海づくり推進協会(2006)平成16年度栽培漁業種苗生産、入手・放流実績(全国)、107pp.
- 2) 水産庁・水産総合研究センター(2007)平成18年

- ヒラメ日本海北・中部系群の資源評価. 平成18年度我が国周辺水域の漁業資源評価, 第3分冊, 1243-1254.
- 3) 北陸農政局福井統計・情報センター (2007) 平成17年福井県漁業の動き. pp.98.
- 4) 北陸農政局福井農政事務所統計部 (2008) 平成18～19年福井農林水産統計年報, 212-215.
- 5) 石川県他 (2008) 平成19年度日本海中西部ヒラメ広域連携調査事業報告書, 福井1-10.
- 6) 竹野功爾・浜中雄一・木下 泉・宮嶋俊明 (1999) 若狭湾西部海域におけるヒラメの成熟, 日水誌, 65, 1023-1029.